

21J-pm21S

日本の高齢者における中枢神経系用薬のポリファーマシーと脆弱性骨折の発症
○小原 依里¹, 坂東 義教², 吉田 知司², 大原 昌樹³, 桐野 豊⁴, 飯原 なおみ⁴ (¹徳島文理大薬学研究科, ²徳島文理大保健福祉, ³綾川町国民健康保険陶病院, ⁴徳島文理大香川薬)

【目的】高齢者のポリファーマシーは健康被害をもたらすことが知られている。しかし、わが国における実態の詳細は不明である。本研究では、中枢精神系用薬 (CNS) の併用と骨折発症との関連性について、悉皆性に優れ医薬品使用歴の一元化を可能とする、レセプト情報・特定健診等情報データベース (NDB Japan) を用いて明らかにする。

【方法】2013年4月から2014年9月に脆弱性骨折を発症した65歳以上の高齢者(麻薬使用者を除く)を対象にケースクロスオーバー研究を行った。発症直前3日間をケース期間、発症前31-33, 34-36, 37-39日間をコントロール期間とし、各期間のCNS成分数およびCNS累積標準化用量(各成分の添付文書1日用量を1.0として累積)を求めた。オッズ比(OR)は条件付きロジスティック回帰分析で算出し、性別、年齢階級別、治療別(外来治療、入院治療)に解析した。

【結果・考察】解析対象者446,101人のうち、女性が81%、85歳以上が30%を占めた。CNS成分数の増加に伴い、脆弱性骨折発症のORはほぼ直線的に増加した(成分数0, 0-1, 1-2, 2-3, 3-4, 4-5, 5-6, 6超過; OR 1, 1.2 (95% CI 1.2-1.2), 1.4 (1.4-1.5), 1.6 (1.5-1.7), 1.9 (1.7-2.0), 1.8 (1.6-2.0), 1.8 (1.5-2.1), 2.2 (1.8-2.8))。CNS累積標準化用量の増加の場合も同様であった(累積標準化用量0, 0-1, 1-2, 2超過; OR 1, 1.2 (1.2-1.3), 1.3 (1.2-1.3), 1.3 (1.3-1.4))。これらの傾向は年齢増加に伴い、また入院治療を必要とする骨折において顕著であり、成分数6超過時における85歳以上のORは65-69歳時の約5倍、入院治療のORは外来治療の約2倍であった。医療機関、薬局ともにフリーアクセス可能なわが国において服薬情報の一元管理は急務であり、高齢者では不可欠である。